わが集落（大和田）の伝統芸能「鬼太鼓（おんでこ）」

上杉俊孝

わがふる里大和田

佐渡のほぼ中央部に位置し、霊峰金北山を背に、南に国中平野を望む台地が私の故郷大和田である。「朱鷺米」の産地である。91世帯、270人弱の人口。65歳以上の1人～2人暮らし世帯は3分の1の31世帯である。ほとんどは専業農家である。若い人のいる家は勤めに出ている第2種兼業農家が多い。

私の集落ではまだ伝統行事がいくつか残っている。いくつか紹介すると、1月15日頃に「とうらやさん」（さいの神）が行われている。この「とうらやさん」は90世帯くらいしかない集落の中で10箇所にも分かれてやっている。「みんなで一緒になってやろう」と何度も提案されているのだが、「それぞれのところに神がいる」のでその場所を「移ることは出来ない」といって一緒に出来ないでいる。また7月31日・8月1日には、薬師堂のお祭りがある。私の小さい頃は佐渡の広い地域からもおまいりに来て一晩中お経（真言）を唱えたり、ご馳走を食べる。多くの屋台が出たりでたいそうな賑わいもあった。当日は、相撲大会や文弥人形なども上演されていた。しかし、形はだいぶ変わってしまった。しかし今も大和田の住民全員が楽しく親睦を深めようと公民館・集落あげての大きな行事として定着しているのである。

大和田の伝統芸能「鬼太鼓（おんでこ）」

私たちの集落で今も青年会が中心になって伝統を守っているのが「おんでこ(鬼太鼓)」である。「しょい とこ でんこんでん」「しょい でんこんでん」の掛け声(太鼓では「ドン ドコ ドンドンドン」「ドン ドンドンドン」と打つ)で始まる威勢のいい響き。

大和田の「おんでこ」の歴史

佐渡の鬼太鼓は相川系・国中系・前浜系の3種類に大きく分けられる。私の住んでいる「大和田集落」(佐渡市千種)の鬼太鼓「おんでこ」は、国中系の中に入り、鬼が太鼓を打ち、2匹の獅子が絡む勇壮なもので広く「佐渡の鬼太鼓」として全国に紹介されている。4月15日の新保八幡宮の祭りにお宮に奉納される行事となっている(今では4月15日は佐渡の島祭りとなっている)。また、その日は集落の各家々を回って門付けの舞も行う(朝の5時前から夜の11時くらいまで)。

大和田の「おんでこ」の歴史についてみると、本当の始まりについてはよくわからない。大和田鬼太鼓は「大正5年に復活させた」と「大和田誌」にある。新穂村「舟下」の森田宗一という天才的な鬼舞いの名手が「舟下流」をつくり、それを見習ったという。さらに幾人かの有志がそのときどきにそれを受け継いで、また、時代と共に研究改善を試み継承されてきたのである。「昭和35年(1960)頃、大和田青年会の人達が勇壮の中にも華やかさを加えた鬼の舞、絡み合う獅子舞にしようと舟下の金子さんのところへ習いに10日間も通って習得したのが現在の大和田鬼太鼓である」と。

継続の危機

続けることは大変。大和田の鬼太鼓も何回かの困難な時期があった。

まず、第1の危機。アジア太平洋戦争が始まった頃。青壮年の大半が出征して鬼の舞手がいない。現在も元気に田仕事に精を出している87歳のHさんにその頃についてお話を伺った。「青年会員も少なくなり、私は15歳で高等科(中学2年に相当)卒業すぐから19歳の戦争に行くまで5年間鬼を舞った。困ったことといえば、昭和15年には雪が降って半纏を着て(鬼の衣装がぬれないように)舞ったこともあったなー。やっぱりうれしかったことと言えば『花』をもらったときだね。伝統的な行事は継続してほしいもんだ。青年が少なく

なったら、壮年の手助けも借りてでも続けてほしいもんだ。太鼓をたたくのがうまい人といえばTさん・Hさん（今のアンちゃんもうまいが）はうまかったなー。お宮では一人で初めから最後までたたいたもんだよ。赤鬼、青鬼それぞれにね」などと懐かしんで話してくれた。

第2の危機は、戦後も昭和40年代（1965～75）。子ども達は大勢いた。しかし、高度経済成長期でほとんどの若者は都会へ出て行った。私の学年も13人いたが残ったのは1人だけ（私自身も含め4人兄弟全部島外へ出てしまった）。次第に青年会員が少なくなり、維持するのに困難が生じたが、伝統の灯だけは消してはならないと青年会員達が頑張ってくれて現在に至っている。その時ただ一人佐渡に残ったH君は今、いろんな作業の休憩のとき当時のことについて私に聞かせてくれた。「当時、自分は青年会長をしていた。ある年は鬼に決まって練習していたのに（3月10日～4月15日）4月になって転勤が決まり島外へ行ってしまった。仕方がなく今までの経験者が半日交代で鬼を舞ったこともある」と。

私は定年を過ぎて故郷に帰った。春の鬼太鼓の太鼓の音が聞こえてくると心ははるか保育園の時にもどる。板壁に棒で「ドン　コ　ドンドンドン」とたたいていた時のことを思い出す。小学校の時に学校を半日で終えるとすぐ家に帰り友達といっしょに「おんでこ」について家々を回り、鬼や獅子の舞を見たり、大きな声で「しょい　でんこん　でん」と掛け声をかけたり、ご馳走をもらって食べたり、腰に手ぬぐいを下げた大きなアンちゃんたちと話したりするのがとても楽しかった。お宮にもいっしょについていき、「やっぱり大和田のおんでこの舞はかっこいいなー」と誇りに思ったりしたものである。

また、同じように佐渡に残って青年会の中心になったK君。学校を卒業後佐渡に就職して集落でずーっとやってきている。逃れられない。伝統芸能を守っていくことには誇りを持っている。「おんでこ」への思いについて「忠実に後輩に伝えていきたい。自分は太鼓をたたくのが専門。お宮では1人一番たたいた。お宮では、4組の鬼が舞う。集落を代表してたたいているのだから。今の若い人には無理かな？太鼓のたたき方にはリズムがある。①荒バチ。『ショイ　デンコン　デン』このリズムは一本調子ではないよ。しりあがりに

打ち込んでいく」とテーブルをたたいて実演を始めた。「②コバチ。『ドン　スコ　ドンドン、スコ　ドンドン、スコスコ　ドンドン　スコ　ドンドン』のリズムについては（ここでは、そら打て、そら打てとはやしながら鬼が太鼓のところで一緒に打つのだが）気分によって応用で打つんだよ」と。まもなく66歳のKさんの名人らしい表現なのである。だから、なかなか後輩たちは真似が出来なかったらしい。でも、いまだに集落の人たちは彼の太鼓は素晴らしいと言い合っているのだ。

第3の危機。平成5年（1993）、青年会員が少なくなり、維持していくことが困難だという声が持ち上がる一方で、存続させるには当時使用している太鼓が張り替えの時期に来ており、また、太鼓が小さく、他村の太鼓の音に負けるという意見もあった。集落長を先頭に青年会代表の数人が水原（阿賀野市）の太鼓店へ行ってみると幸いにも総ケヤキで大きさも希望の立派な太鼓があった。そこで、集落の各家々から多額の御芳志をお願いして購入することが出来た。これによって青年会員も奮起して3月10日から練習に入り、集落の理事・壮年会員の応援体制も整い、今まで以上に盛り上がり人々は青年たちに拍手喝采をおくった。以来、青年会の団結はもちろん、集落民あげて祭日を盛大に運ぶこととなった。

第4の危機。現在。ますます青年の数が少なくなってきていることである。今の青年の親が「第2の危機の時の青年であった」ことである。佐渡の人口がどんどん減ってきている波はここ「大和田」にも押し寄せているのである。

子ども鬼太鼓

子ども鬼太鼓の歴史は新しい。昭和61年（1986）の薬師祭りの前夜祭で子ども鬼太鼓をやることになった。子どもの指導は青年会が、子ども用の鬼の面は地域の面を彫っている人が、面につける毛、衣装の材料、衣装の製作など全てを集落の婦人会が受け持って出来上がった。62年（1987）の7月31日の前夜祭で披露された。太鼓の裏打ちは中学生がやり、衣装をつけた小学生が見事な舞を演じ大勢の観衆の大拍手となった。以後、毎年のように行われており、大和田鬼太鼓の舞手の後継者とし、また故郷の芸能について心にとめておいて欲しいものである。

おわりに

昭和2年（1927）生まれのGさん。「鬼太鼓」について語ってもらった。「子どものときから、ついて回った。しかし、勤めで青年会の活動には参加できなかった。村で一番大きい行事。村を活気付ける行事。村を団結させる行事。伝統行事が無ければ村の人々の心はバラバラになる。新保八幡宮のお祭りでの大和田の鬼太鼓は華やかな舞で大和田の誇りであり、自慢です」と。

（うえすぎ　としたか・佐渡市千種）

鳥追い唄とトキ（旧川口町）（1）

…いっちにっくい鳥は　ドウとサンギとコ～スズメ…

唄の中の害鳥の筆頭は「ドウ」であり、そのドウとは「トキ」のことです。害鳥は「信濃の国」から追われて来て「佐渡島へホーイホイ」と追いやられます。

「鳥追い」は、豊作を祈り、鳥追い唄を歌いながら家々を巡り、害鳥を追い払う子どもたちの行事で、江戸時代の北越雪譜にも図入りの記述があります。

稲作中心に越後の小正月行事は多彩でした。斉の神、もぐら追い、生（な）り木責めなどもセットで、豪雪地の特性を基盤に広く分布した活動でした。

特徴としては歌詞や曲も、雪洞や祭壇の作り方も、各集落や家々で微妙に違っていました。

主役は子どもたちですが、子どもだけでは実行できません。集落毎に伝承が微妙に違うのは、地域の大人との関わりの中で変化したと考えられます。

伝統を、次の世代に継承するには、集落の長老や若手（親）の熱意と協力が不可欠です。

（注）『新潟県における鳥追い歌』（野島出版）　（河合）